

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸時代、金沢城（現在の石川県にある）での鼓くらべ（「鼓」という打楽器の演奏を競う会）を間近に控えたお留伊という十五歳の娘がいた。そのもとに旅の絵師を名乗る謎の老人が訪ねてくるようになった。その老人は、ひどくやせており、いつも左手だけをふところに入れていく。しばらく姿を見せなかったが、ある晩のこと、病ですっかり弱ってしまった老人は、お留伊を宿へ呼び出し、昔話を始めた。

十余年前に、観世市之丞と六郎兵衛という二人の囃子方があって、小鼓を打たせては竜虎とよばれていたが、二人とも負け嫌いな激しい性質で、常々互いに相手をしのごうとせり合っていた。……それが、ある年の正月、領主前田侯の御前で鼓くらべをした。どちらにとっても一代の名を争う勝負だったが、ことに市之丞の意気はすさまじく、曲半ばにいたるや、精根を尽くして打ちこむ気合で、ついに相手の六郎兵衛の鼓を割らせてしまった。打ちこむ気合だけで、相手の打っている鼓の皮を割ったのである。一座はその神技に驚嘆して、「友割りの鼓」と今に語り伝えられている。

「私は福井の者ですが、」と、老人は話を続けた。「……あのとときのさわざはよく知っております。市之丞のヒョウバンはたいそうなものでございまして。……けれど、それほどの面目をほどこした市之丞が、それから間もなくどこかへ去って、行方知れずになったということをお聞きくださいませんか。」

「それも知っています。あまり技が神に入ってしまったので、神がくしにあつたのだと聞いています。」

「そうかもしれません。本当にそうかもしれません。」老人は息を休めてから言った。「……市之丞は、ある夜自分で、鼓を持つほうの腕を折り、生きているかぎり鼓は持たぬとちかかって、どこともなく去ったと申します。……私は、その話を聞いたときにこう思いました。すべて芸術は、人の心を楽しませ、清くし、高めるために役立つべきもので、そのためにだれかを負かそうとしたり、人を押しつけて自分だけの欲を満足させたりする道具にすべきではない。鼓を打つにも、絵をかくにも、清浄な温かい心がないかぎり、なんの値打ちもない。……お嬢様、あなたは優れた鼓の打ち手だと存じます。お城の鼓くらべなどにお上がりなさらずとも、そのお手並みは立派なものでございます。おやめなさいまし。人と優劣を争うことなどはおやめなさいまし。音楽はもつと美しいものでございます。人の世で最も美しいものでございます。」

（中略）

金沢城二の曲輪に設けられた新しい楽殿では、城主前田侯をはじめ重臣たち臨席の下に、嘉例の演能を終わって、すでに、鼓くらべが数番も進んでいた。

これにはいろいろな身分の者が加わるので、城主の席には御簾が下ろさされている。お留伊は、ひかえの座からその御簾の奥を透かし見しながら、幾度も総身の震えるような感動を覚えた。……しかし、それは気後れがしたのではない。楽殿の舞台で次々に披露される鼓くらべは、まだどの一つも彼女を恐れさせるほどのものがなかった。彼女の勝ち確実である。

そして、あの御簾の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから姿を拝んだこともない太守の手から、一番の賞を受けるときの自分を考えると、そのほこらしさと名譽の輝かしさに身が震えるのであった。

やがて、ずいぶん長い時がたつてから、ついにお留伊の番がやってきた。

「落ち着いてやるのですよ。」師匠の仁右衛門は、自分のほうがおろおろしながらくり返して言った。「……御簾のほうを見ないで、いつもけいこするときと同じ気持ちでおやりなさい。大丈夫、大丈夫きつと勝ちますから。」

お留伊は、静かに微笑しながらうなずいた。

相手はやはり、能登屋のお宇多であった。曲は「真ノ序」である。……執拝札を済ませて、お留伊は左に、お宇多は右に、互いの座を占めて鼓をとった。

そして、曲が始まった。お留伊は自信をもって打った。鼓はその自信によくこたえてくれた。使い慣れた道具ではあったが、かつてそのときほど快く鳴り響いたことはなかった。……三ノ地へかかったとき、早くも十分の余裕をもったお留伊は、ちらと相手の顔を見やった。

お宇多の顔はあおざめ、その唇は引きつるように片方へゆがんでいた。

それは、どうかして勝とうとする心をそのまま絵にしたような、激しい執念の相であった。

そのときである。お留伊の脳裏にあの旅絵師の姿が浮かび上がってきた。ことに、いつもふところから出したことのない左の腕が！——あの人は観世市之丞様だった。

お留伊は愕然として、夢から覚めたように思った。

老人は、市之丞が鼓くらべに勝ったあとで自分の腕を折り、それも鼓を持つほうの腕を自ら折って、行方をくらましたと言ったではないか。……いつもふところへかくしている腕が、それだ。——市之丞様だ。それにちがいない。

そう思うあとから、目の前に老人の顔がアザヤカナ幻となつて描き出された。それから、あの温雅な声が、耳もとではつきりこうささやくのを聞いた。……音楽はもつと美しいものでございます。

お留伊はふり返った。そしてそこに、お宇多のけんめいな顔を見つけた。ひとみのうわずった、すでに血の氣を失った唇を片方へ引きゆがめている顔を。

——音楽はもつと美しいものでございます。人と優劣を争うことなどおやめなさいまし。音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の聲が再び耳によみがえってきた。……お留伊の右手がはたと止まった。

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、意外な出来事に驚いている客たちの動揺を聞きながら、鼓を下ろしてじっと目をつむった。老人の顔が笑いかけてくれるように思え、今まで感じたことのない、新しい喜びが胸にあふれてきた。そして、自分の体が見えぬいましめを解かれて、やわらかい青草の茂っている広い広い野原へでも解放されたような、軽い生き生きとした気持ちでいっぱいになった。

（山本周五郎「鼓くらべ」による）

(※1) 囃子方はやしかた…能楽、歌舞伎等で音楽の演奏を受け持つ人。

(※2) 竜虎りゆうこ…互いに優れた力量をもっていて優劣がない者どうし。

(※3) 神がくし…子ども等が急にどこに行つたか分からなくなることに、昔は山の神やてんぐのしわざだと信じられていた。

(※4) 二の曲輪くるわ…お城の天守閣を中心とする区域に隣接する区域。  
二の丸。

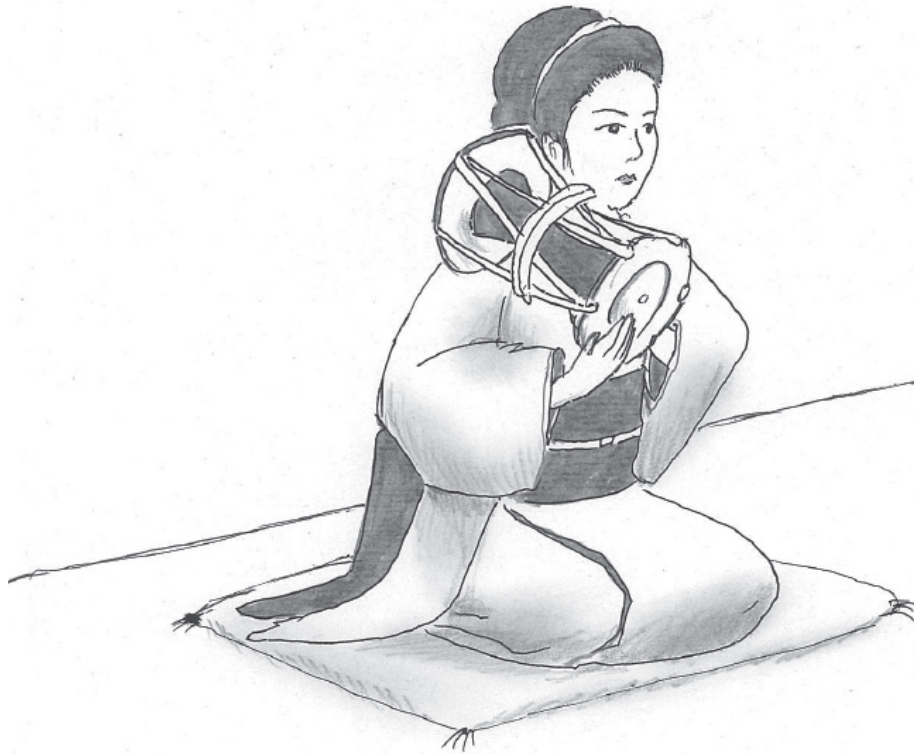
(※5) 嘉例かれいの演能えんのう…めでたいときのしきたりとして演じる能。

(※6) 御簾みす…へりを付けた、目の細かいすだれ。

(※7) 太守たいしゆ…大名。ここでは前田氏。

(※8) 真ノ序…能の舞の一つである「真ノ序ノ舞」の略。

(※9) 三ノ地…「三ツ地」のこと。「真ノ序」の「序」という譜ふを、  
六回ほどくり返し、「三ツ地」となる。

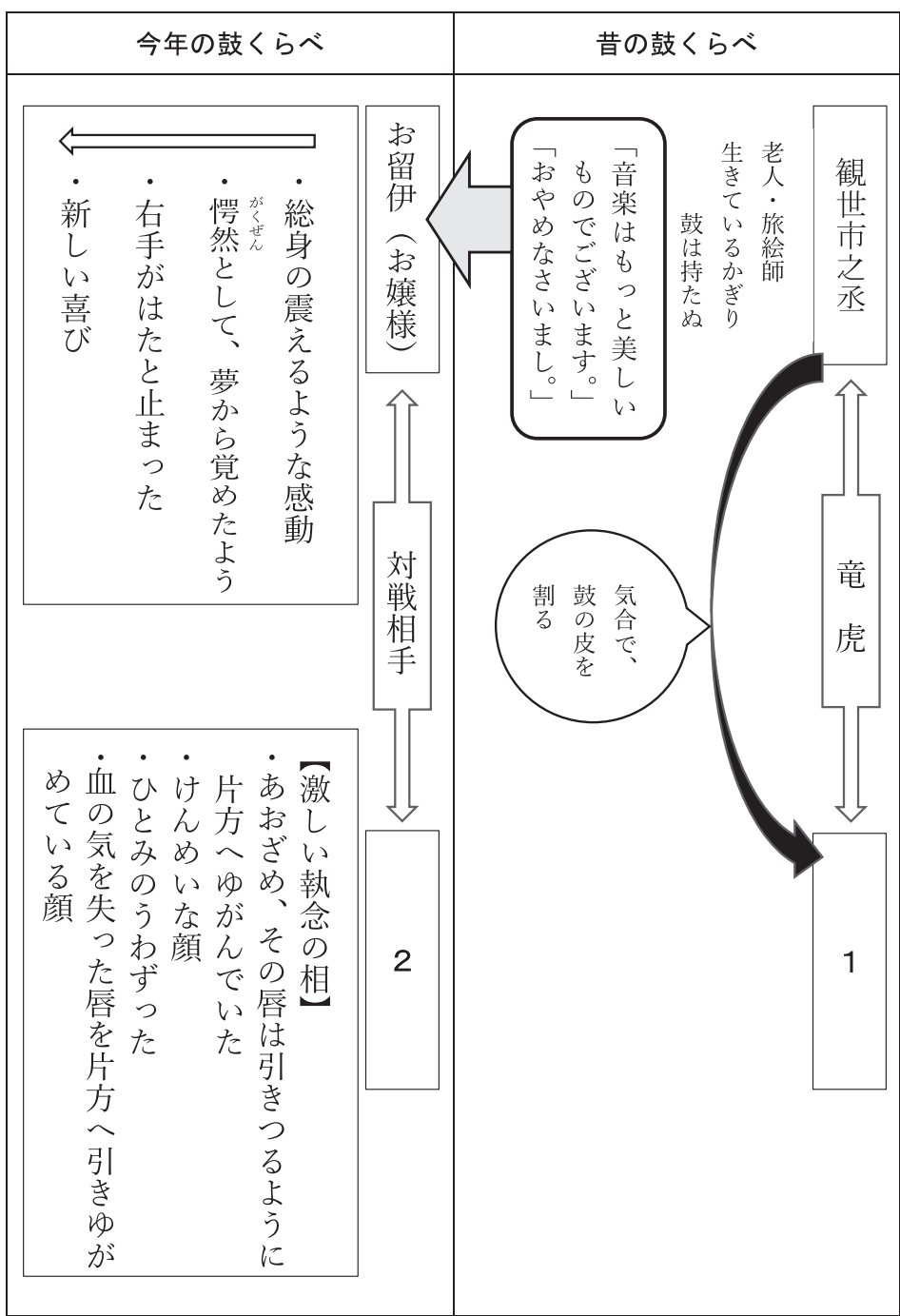


一 線部①から③のカタカナは漢字(送り仮名を含む)に、漢字はひらがなに直し、楷書<sup>かいしょ</sup>でていねいに書きなさい。

- ① ヒョウバン      ② 快く      ③ アザヤカナ

二 江戸町中学校二年一組の国語の授業では、本文の登場人物を次のような図にまとめました。この図について、あとの各問いに答えなさい。

【登場人物をまとめた図】



【AさんとBさんの話合いの様子】

(1) 【登場人物をまとめた図】の 1 ・ 2 に入る人物名を、「**鼓くらべ**」の文章中から抜き出して書きなさい。

(2) お留伊（お嬢様） の人物像として最も当てはまるものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 目標のためには手段を選ばない勝ち気な娘
- 2 きたえた鼓の腕前を常に鼻にかけている娘
- 3 思慮深く大舞台でも堂々として動じない娘
- 4 人の話に耳を傾けようとしながんこな娘

(3) 【登場人物をまとめた図】を基に、AさんとBさんが話し合いをしています。これを読んであとの問いに答えなさい。

Aさん 「まとめた図では、お留伊の『**右手がはたと止まった**』とあるけど、どうしてお留伊は大切な**鼓くらべ**の場で鼓を打つのをやめてしまったんだろうね。」

Bさん 『**鼓くらべ**』の文章を見ると、演奏の前のお留伊は、ほころしさと名譽の輝かしさ<sup>⑤</sup>を感じていたのね。」

Aさん 「曲が始まってからは、ア（二字）と余裕をもって演奏を続けていたよ。」

Bさん 「何がきっかけで演奏を止めてしまったのかな。」

Aさん 「お宇多の表情を見た後に愕然としたことが関係ありそうだね。」

Bさん 「まとめた図では、お宇多の表情を『**激しい執念の相**』とまとめたけれど、『**執念**』ってどういう意味かな。」

Aさん 「辞書で引くと、『ある一つのこと**に強く心をひかれ、そこから動かない心**』とあったよ。ここではお宇多のイ（八字）とする気持ちを指しているんだよ。」

Bさん 「そこで、老人が『**おやめなさいまし**』と言った理由がわかったんじゃないかな。」

Aさん 「だからこそ、図にまとめたように、演奏を止めたお留伊の胸に『**新しい喜び**』があふれてきたんだよね。」

Bさん 『**新しい喜び**』ってどんな気持ちを表しているのかな。」

Aさん 「ウ（九字）から解放されたことだと思うよ。」

(あ) 【AさんとBさんの話し合いの様子】に——線部⑤「ほこらしさと名誉の輝かしさ」とありますが、【登場人物をまとめた図】では、

このお留伊の心情を別の言葉で表現しています。【登場人物をまとめた図】の中から、十五字以内で抜き出しなさい。

(い) 【AさんとBさんの話し合いの様子】の   に入る語句を、( ) の字数に合わせて、「鼓くらべ」の文章中から抜き出しなさい。

(う) 【AさんとBさんの話し合いの様子】の——線部⑥「老人が『おやめなさいまし』と言った理由」に関連して、老人がお留伊に伝えたかったこととして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 音楽を心から愛することの尊さ
- 2 演奏の優劣をつけることの大切さ
- 3 楽器をたくみに奏<sup>かな</sup>でることの難しさ
- 4 一つの音楽だけを楽しむことのむなしさ

三 「鼓くらべ」の文章中の「青草」<sup>④</sup>は「青い草」という意味です。これと同じ構成の熟語として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 勝負
- 2 強者
- 3 温暖
- 4 読書